SAJ・野沢慎司［編］
ステップファミリーのきほんをまなぶ
――離婚・再婚と子どもたち

金剛出版・A5判並製
定価2,200円（税抜）
2018年11月刊

評者＝**和田一郎**（花園大学）

本書は，ステップファミリーについて理解を深めるために，さまざまな知見に基づき公平で客観的で，かつわかりやすく論述したわが国初の良著といえます。

はじめに，「ステップファミリー」について子ども中心の定義から論述しており，子どもと離れて暮らす別居親子との関係も含め，溝が生じやすい構造をもつステップファミリーにおける関係づくりについて，国内外の最新の研究の知見を提供しています。子どもたちの気持ちに寄り添い，カップル関係を育みながら，先に存在する親子関係や祖父母と孫の関係を維持するための知恵やスキルの習得を，クイズやマンガを用いて，個人やカップル，グループで使えるようになっています。

「前の配偶者があなたにとって満足のいくパートナーではなかったとしても，子どもにとっては大切な親です」

本書において一貫しているのは，このような子どもの視点からの論述です。

アメリカでステップファミリーがよく使う言葉に，“Let children know it is okay to love the absent parent（別居親を大好きなままでいても良いということを，子どもたちに伝えましょう）”というものがあります。通常は離別するときはパートナー間の関係性は悪化します。子どもと同居する親は別居親について否定的な言動をとることや，別居親と関わらないように子どもを操作する可能性が指摘されています。しかし，親の離婚を経験した子どもたちでも，別居親との交流を続けている場合には，離婚を経験していない子どもたちと同程度の自己肯定感をもつことが示されていることにも言及されています。わが国の離婚を経験した子どものケア政策などについては，大人の視点のみで議論され，傷ついた子どもたちが翻弄されています。本書には，パートナー間の関係性と，同居親・別居親と子どもの関係は別個であり，そのつながりを断ち切らず，またステップファミリーになった後も，つながりを継続することの重要性や考えるヒントがちりばめられています。これは子どもの権利条約にも沿った世界的な潮流を，後進国であるわが国でも取り入れ，子どもの福祉を向上させる可能性を秘めています。わが国のひとり親経験をした子どもの予後が悪いのも，子どもの視点が抜け落ちていることが示唆され，今後の支援方法・政策に活かされる内容であり，さまざまな方々に読んでいただきたいと思います。

「子どもにとって，親の離婚や再婚は大きな損失経験であるが，家族は形を変え，子どもをケアするチームとして存在し続ける」。あくまで子どもの視点に立った，改正児童福祉法の子どもの最善の利益を考えた名著だと思います。